ペルー佐賀県人会創立35周年記念式典株丹大使挨拶

【平成27年8月4日（火），於：神内ホール】

御列席の皆様

本日，副島副知事及び中倉県議会議長の御列席を得て，ペルー佐賀県人会創立35周年記念式典が挙行されますことを，御慶び申し上げます。

鎖国が国是であった時代，佐賀県は肥前と呼ばれ，佐賀藩が治めていました。

当時の日本で世界に向かって開港していたのは長崎だけでしたが，その長崎を警備していたのが，福岡藩と佐賀藩でした。

1808年に発生したフェートン号事件の引責や1828年のシーボルト台風による甚大な被害もあり，藩の財政が危機的状況にある中で，満15歳の鍋島斉正（なりまさ）が新藩主となりました。

斉正は「用を節して人を愛す」，つまり財政を節約して人をいたわるという考えの基，改革に取り組みます。

歳出を減らし，産業を育成し，財政改革を行う一方，優秀な人材を育成する教育改革や農村復興を行ったほか，出自に関わらず有能な人材を積極的に登用しました。また，「からくり儀右衛門」と呼ばれる田中久重（ひさしげ）を採用して，反射炉などの科学技術を導入し，最新式の大砲や鉄砲の製造に成功しました。

こうして，技術立国（県）に成功した佐賀は，鹿児島，山口，高知と並んで幕末から明治にかけて日本をリードする偉人が輩出する地域になったのです。

　ペルーにおける日本人移住の歴史は，南米でも最も古く，今年で116年を迎えます。一世紀余にわたるこの間，幾多の困難な時代があったことと思います。

しかしながら，逆境の中で改革を成功させた佐賀県人の血を引く皆さんは，それを克服し，このペルーの地で成功し活躍されるとともに，日・ペルー友好の架け橋として重要な役割を果たしていることは，日本の政府，国民にとっても誇りであります。

本日は式典に佐賀県からも多くの方が参加されておられます。

同じ佐賀県人同士としての交流が，今後様々な形で盛んになっていくことを心から祈念して私の挨拶といたします。

ありがとうございました。